現代女性の和服観に 関する一考察

会 員 中 川 早 苗*

曾 根 い ず み**

1. 緒 言

和服は、日本の風土や生活のなかで育まれ、長い歴史の過程で完成された日本独自の伝統的な衣服であり、明治以降洋服が導入されるまでの日本の衣生活は、そのほとんどが和服であった。しかし第2次大戦後の生活の合理化や洋風化に伴うライフスタイルの変化や、民主化に伴う女性の職場への進出は、活動的で合理的な洋服への志向を高め、新しい繊維素材の開発や大量生産による安価で手軽な既製服の発達ともあいまって、人々の衣生活のほとんどを洋服に変えた。現代女性、とくに若い女性にとって、和服は成人式や結婚式といった特別の日だけに着用する晴着として位置づけられており、和服に関する知識も持たず、ひとりで着装できない女性が増えてきている。活動的な洋服に比べると動きにくく着くずれしやすいうえに、着付けがむずかしく、手入れが面倒な和服は、現代のテンポの早い日常生活には不向きで敬遠されているとはいえ、高度な染織技術を駆使してつくられた和服のもつ美的価値や芸術的価値は現代でもなお高く評価されており、嫁入り前の娘に和服を一揃いもたせるといった慣習も依然として残っている。このような状況のなかで和服の需要を喚起することに必死の和装業界では、和服着用の機会を増やす工作や海外有名デザイナーによるブランド着物の開発に力を注ぎ、和服は非日常化、高級化、趣味化、ファッション化の傾向を強めている。

本研究は、このような和服の高級化、趣味化、ファッション化現象を促す諸要因を、現代女性の和服に対する意識や行動のなかに探り、彼女達にとって和服がどのような意味をもっているのか、その価値観を明らかにする

A Consideration of Modern Womens' View on 'Kimonos'.

By Sanae Nakagawa and Izumi Sone,

Department of Clothing Science, Nara Women's University,
Nara City.

This study reports the modern womens' consciousness and behaviour of kimono, the japanese traditional costumes. The investigation has revealed following results:

- (1) As shown in the category distribution classified by the wearing frequency of kimonos, women who wear western garments in daily life and kimono on a formal occasion are placed in a highest category of 54.4%. Modern Japanese women wear either kimonos or western garments depending on their social circumstances.
- (2) Women's knowledge of wearing ability of and degree of consciousness of kimonos decreases with lowering womens' age up to 40 years old.
- (3) Womens' rating revealed that kimonos were rated low from the view point of practical use. Women regarded kimono impractical in the every day living. By contrast, kimonos were rated high from the social, aesthetical and fashionable point of view. Women regarded kimono as an important medium to most express the beauty of Japanese women. Kimonos have their significance in ceremonial garments or fashionable dresses to enjoy the life for modern Japanese women.

(Received March 22, 1983)

ことを目的として行った調査の報告である。

2. 調査方法

2.1 基本概念および基本図式

和服は、室町時代装束類の下着であった小袖が表着化し、江戸時代にほぼ今日の形が完成されたもので、上下一体の直線裁ち前開形式で、前を打合わせ、帯をしめることによって着装が成立することを大きな特徴としている。明治以降ヨーロッパから導入された洋服と区別する意味で和服と呼ばれるようになったもので、今回の調査では、このような一般に着物と総称されている日本の伝統的な衣服を「和服」と定義し、単独で洋服の上に着用される半天などは除外した。なお調査の基本的な方法や基本仮定については、既報¹⁾と同様の考え方にたっているが、ここでは省略する。

* S. Nakagawa, Member. 奈良女子大学 家政学部 講師

** I. Sone, 奈良女子大学 家政学部

図1は、現代女性の和服観形成に影響を及ぼすと考えられる諸要因を、関連文献や資料およびブレン ストリーシング、KJ法などによって仮説的に組立て、マッピングしたものである。調査にあたっては、この図を参考に、理論仮説を構成し、測定の可能性と可能性を検討したうえで、枠組を設定し、図2のような分析図式を作成した。

図2 和服観の分析図式

生活を取巻く社会環境要因を外生変数として枠組の外におき、分析は、基本属性を独立変数に、ライフスタイル要因を媒介変数として、従属変数である“現代女性の和服に対する意識や行動”を明らかにするという図式である。調査票の作成にあたっては、この分析図式をもとに、それぞれの変数を測定可能な質問項目におきかえ、主要な項目については、リッカート法によって測定の有効性や妥当性を検討したのち、調査項目を決定した。

2.2 調査の概要

- ① 調査対象；奈良市内に居住する満18才以上の女性 600人
- ② 対象抽出方法；1981年4月1日現在、奈良市内に居住する満18才以上の女性を母集団とし、層別二段無作為抽出法により行った。
- ③ 調査方法；質問紙による配票留置法
- ④ 調査時期；1981年10月23日～11月12日
- ⑤ 回収状況；配布数600票、回収数376票、回収率62.7%
- ⑥ 調査項目
独立変数；年齢、学歴、未婚の別、職業、世帯主職業、ライフステージ、子供の人数、家族形態、収入、世帯収入、世帯主の社会的地位、仕事形態
媒介変数；通勤時間、家事労働時間、余暇時間、居住

地域、住居形態（部屋数、和室数）、余暇の過ごし方、生活目標、階層帰属意識、生活意識、衣服観、年間被服費
従属変数；和服機能への評価、和服へのイメージ、和服の着用度、着用場面、所持枚数、和服のTPO認識度、着付けの可否、和裁技術程度、和服情報接触度、和服への関心度、年間和服費

2.3 分析方法

① 単純・クロス集計

収集した調査データを項目別に単純集計およびクロス集計し、サンプル全体の度数分布や特定2変数間の関連を明らかにする。

② タイプ別クロス集計

和服の着用頻度によってサンプルを3つのタイプに分類し、各タイプの諸特徴を明らかにするために、他の諸度数とのクロス集計を行う。

③ 数量化Ⅱ類による分析

3つのタイプを外基準として数量化Ⅱ類による分析を行い、タイプ分けに決定的な作用を及ぼしている要因がなにかを明らかにする。

（以上の処理は、FACOM-M200を使用）

3. 結果および考察

3.1 単純・クロス集計結果

調査対象者の主な基本属性の単純集計結果は、表1～表6に示すとおりである。

図3は、和服の機能への評価の単純集計結果である。和服の機能を実用性、社会性、審美性、ファッション性の4つの観点から評価してもらったが、やはり実用性の面では“着付けに手間や技術があるので、普段着ようとは思わない”と70%の人が答えており、和服が今や多くの女性にとって日常着とはいえなくなっている。一方、“和服と洋服の二重生活は不経済なので和服は必要ない”という意見には、約65%の人がそうは思わないと答えている。また結婚式や葬式といった冠婚葬祭や、七五三などの伝統的な行事には和服がもっともふさわしいと儀礼性や威信性などの社会性も高く評価されている。なかでも和服の洗練された美しさは、女性の美しさ、とくに日本女性の美しさをもっともよく表現してくれる衣服であると審美性における評価が高くなっている。ファッション性の面では、変身性や装飾性が高く評価されており、“和服を上手に着こなしている人を見るとうらやましい”と答えている人が80%もいるという結果は、普段洋服生活をしている現代女性にとっても、和服はやはりあこがれの的として根強く支持されているといえる。

これらの結果を総合すると、日常の活動的な生活では洋服を着ている女性も、結婚式や葬式など慣習が根強く残っている非日常的な世界では和服を着るべきだとする

—実用性—

染めなおしたり、仕立てなおせるから
着物は多少高価であっても長い目でみ
れば経済的だ

着物は、はやりすたりが少ないので、
洋服より長く着用できるから経済的だ

着物は動きづらくて肩がこるので着た
くない

和服と洋服の二重生活は不経済なので
和服は必要ないと思う

着物を着ると暖かいので寒い日など着
たいなあとと思う

着物は洋服よりも腕など自由に動かさ
るので、くつろげて好きだ

和服類はみなたたんでたんすにしまえ
るから場所もとらず洋服より収納が便
利なものだと思う

黒い瞳、黒い髪の日本人がいちばん和服が似合うと思う

手織りや手描きのものは、やはりつくった人の心が入っていて、特別に味があると思う

着物は形が一定であるが、その形は洗練されていて、非常に美しいと思う

—ファッション性—
着物を着たとき、おしゃれをしたという気持ちがある

和服を着ると、いつもの自分とは違った気分になれる

うんと おしゃれをしたいと思ったとき
着物を着たくなる

着物はいまや豊かさの象徴といえると思う

図3 単純集計結果 (和服の機能への評価)

人が多い。しかしそれが単に しきたりだからという理由からばかりではなく、和服が持っている威厳や上品さといった伝統的な美しさが、あらたまった場所では最もふさわしいということ、特に黒い瞳と黒い髪の日本女性にはいちばんよく似合うとの評価に基づく結果といえよう。また「かくすことでかえって女性の美しさが演出される」という質問項目に約76%の人が肯定しているといった結果は、タンク トップやミニ スカートなど肌を露出する洋服が日常化しているなかで、和服が持っている独自の着装美が「いつもの自分とは違った気分になれる」「おしゃれをしたという気持がする」といった変身願望を満たす効果へとつながり、それが非日常的な世界を演出する、有効な手段になっているからといえよう。生活が豊かになったのか、洋服と和服の二重生活を不経済だとする人は少なく、日常生活では洋服が主流を占めるとはいえ、非日常的な場面では儀礼用として、あるいは おしゃれ用としてまだまだ和服の評価は高く、とくに「手織りや手描きのものは特別な味がある」と約93%近い人が肯定しており、和服の高級化、趣味化、ファッション化は今後ますますその傾向を強めるものと考えられる。

表7～表11は年令と和服のTPO認識度、着付けの可否、和裁技術程度、和服情報接触度、年間和服費とのクロス集計結果である。年令と各変数との間の関連の強さをクramer関連係数で示したものであるが、いずれも年令との相関が高いことがわかる。つまりこの結果からも明らかのように、40代を境に年令が若くなるほど和服の着装ルールに自信のない人や、自分で着られない人、縫えない人が増えている。また和服情報への接触度も40代から50代の女性をもっとも高くなっている。

このような傾向は、表11の年間和服費においてもみられ、40代から50代の女性在和服にける費用が最も高くなっている。

表12、表13は、ライフ ステージと和服情報接触度、衣服観とのクロス集計結果である。和服情報への接触度では、独身の社会人と末子が中・高生以上の子供を持つ女性が高くなっているが、ともに結婚適令期の女性、あるいは適令期の娘をもつ親にとって、和服が大きな関心事になっていることを示しているといえよう。衣服に対する価値観では、学生や独身の社会人が、衣服を何よりも自分の自由な気持ちや個性を表現するものとしてとらえているのに対して、末子入園前の子育て期の女性は、

活動しやすい衣服を最も重視し、ライフ ステージが高くなるにしたがって、衣服本来の機能に加えて生活を楽しむ豊かにしてくれるもの、身だしなみや儀礼として他人との円滑な関係を保つのに役立つものとしてとらえられており、ライフ ステージによって衣服観が大きく変化することが明らかになった。

3.2 タイプ別クロス集計結果

表7 年齢と和服のTPO認識度とのクロス集計結果

	自信あり	ほぼひととおり	多 少	あまり自信なし	まったく自信なし
18～22	0.0	14.3	28.6	28.6	28.6
23～27	0.0	15.0	25.0	47.5	12.5
28～32	0.0	16.7	42.4	30.3	10.6
33～37	3.2	31.7	34.9	23.8	6.3
38～42	3.4	23.7	45.8	18.6	8.5
43～47	2.4	35.7	45.2	16.7	0.0
48～52	12.9	54.8	22.6	9.7	0.0
53～57	13.8	58.6	24.1	3.4	0.0
58～62	16.7	44.4	38.9	0.0	0.0
63～67	10.0	60.0	10.0	10.0	10.0
68～	42.9	28.6	14.3	14.3	0.0

$\sqrt{Cr}=0.283$

表8 年齢と和服着付けの可否とのクロス集計結果

	すべて自分ひとりで着られる	普段着は自分で着られる	すべて人に着せてもらう
18～12	0.0	42.9	57.1
23～27	10.0	55.0	35.0
28～32	10.4	73.1	16.4
33～37	19.0	65.1	15.9
38～42	23.7	59.3	16.9
43～47	31.0	64.3	4.8
48～52	48.4	51.6	0.0
53～57	62.1	37.9	0.0
58～62	66.7	33.3	0.0
63～67	80.0	20.0	0.0
68～	85.7	14.3	0.0

$\sqrt{Cr}=0.384$

和服の着用頻度を基準に、サンプルをつぎの3つのタイプに分類し、他の諸変数とのクロス集計を行った。

和服愛好型（構成比28.5%）；1年中ほとんど和服を着ているか、洋服も着るが和服を着る機会の多いタイプ。

和洋二重型（構成比54.4%）；普段は洋服を着ているが、結婚式や葬式、お正月や子供の入学式、卒業式といったあらたまった日には和服を着るタイプ。

表9 年齢と和裁技術程度とのクロス集計結果

	できない	つくろい基	ゆかた	普段着	外出着	収入が得られる
18～22	85.7	0.0	14.3	0.0	0.0	0.0
23～27	57.5	17.5	15.0	7.5	0.0	2.5
28～32	43.3	25.4	16.4	9.0	3.0	3.0
33～37	38.1	15.9	30.2	9.5	3.2	3.2
38～42	33.9	25.4	22.0	8.5	8.5	1.7
43～47	19.0	11.9	35.7	21.4	11.9	0.0
48～52	0.0	6.5	25.8	32.3	19.4	16.1
53～57	0.0	3.4	17.2	41.4	31.0	6.9
58～62	0.0	0.0	5.6	38.9	50.0	5.6
63～67	20.0	0.0	0.0	30.0	40.0	10.0
68～	0.0	0.0	0.0	42.9	57.1	0.0

$\sqrt{Cr}=0.326$

表10 年齢と和服雑誌、広告接触度とのクロス集計結果

	よくみる	たまにみる ことがある	ほとんどみない
18～22	14.3	28.6	57.1
23～27	7.5	75.0	17.5
28～32	9.0	70.1	20.9
33～37	17.5	65.1	17.5
38～42	30.5	54.2	15.3
43～47	38.1	45.2	16.7
48～52	41.9	54.8	3.2
53～57	37.9	48.3	13.8
58～62	16.7	77.8	5.6
63～67	10.0	70.0	20.0
68～	42.9	42.9	14.3

$\sqrt{Cr}=0.252$

表11 年齢と1年間の平均和服費とのクロス集計結果

	0	～2万	2万～5万	5万～10万	10万～15万	15万～20万	20万～25万	25万～
18～22	71.4	0.0	0.0	14.3	14.3	0.0	0.0	0.0
23～27	65.8	21.1	13.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
28～32	74.6	15.9	4.8	3.2	1.6	0.0	0.0	0.0
33～37	66.1	22.6	4.8	3.2	1.6	0.0	0.0	1.6
38～42	55.4	16.1	14.3	1.8	3.6	7.1	1.8	0.0
43～47	35.0	15.0	22.5	12.5	5.0	2.5	2.5	5.0
48～52	14.8	22.2	3.7	18.5	11.1	3.7	3.7	22.2
53～57	22.2	11.1	14.8	11.1	14.8	7.4	3.7	14.8
58～62	23.5	17.6	17.6	17.6	11.8	5.9	5.9	0.0
63～67	40.0	30.0	10.0	10.0	0.0	10.0	0.0	0.0
68～	42.9	28.6	28.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

$\sqrt{Cr}=0.245$

表12 ライフ ステージと和服雑誌、広告接触度とのクロス集計結果

	よ く み る	たまにみることがある	ほとんどみない
学 生	16.7	16.7	66.7
独身の社会人	50.0	25.0	25.0
既 婚 子なし	5.3	78.9	15.8
末 子 入園前	8.5	68.3	23.2
末 子 幼, 小	14.7	65.7	19.6
末 子 中, 高	45.6	42.1	12.3
末 子 大学生	25.9	70.4	3.7
末 子 社会人	29.6	66.7	3.7
末 子 独 立	38.6	50.0	11.4
そ の 他	25.0	62.5	12.5

$\sqrt{Cr}=0.285$

表13 ライフ ステージと衣服観(自分の考えにいちばん近いもの)とのクロス集計結果

	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ
学 生	20.0	80.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
独身の社会人	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	50.0
既 婚 子なし	38.9	38.9	11.1	0.0	0.0	0.0	5.6	5.6	0.0
末 子 入園前	56.2	16.4	4.1	0.0	4.1	0.0	11.0	8.2	0.0
末 子 幼, 小	39.3	16.7	6.0	1.2	6.0	0.0	15.5	15.5	0.0
末 子 中, 高	44.7	15.8	2.6	0.0	2.6	0.0	21.1	13.2	0.0
末 子 大学生	42.9	28.6	0.0	0.0	0.0	0.0	19.0	9.5	0.0
末 子 社会人	47.6	9.5	0.0	0.0	4.8	0.0	14.3	23.8	0.0
末 子 独 立	41.7	8.3	8.3	0.0	0.0	0.0	13.9	27.8	0.0
そ の 他	25.0	25.0	0.0	0.0	0.0	0.0	25.0	25.0	0.0

$\sqrt{Cr}=0.310$

- ア 衣服とは身体を保護し、活動しやすくしてくれるものだ。
イ 衣服とは自分の自由な気持ち個性などを表現するものだ。
ウ 衣服とは自分の美しさを引出してくれるものだ。
エ 衣服とは自分の地位や経済的ゆたかさを表現してくれるものだ。
オ 衣服とは安い費用で最大限に利用するものだ。
カ 衣服とは社会や自分の属する集団に仲間と認めてもらうためのものだ。
キ 衣服とは生活を楽しくゆたかにしてくれるものだ。
ク 衣服とは身だしなみや儀礼として、他人と円滑な関係を保つのに役立つものだ。
ケ その他。

洋服愛好型（構成比17.1％）；まったく洋服しか着ないタイプ。

図4は、タイプ別クロス集計結果である。

当然のこととはいえ、洋服愛好型に比べ、和服愛好型の方が和服の所持枚数も多く、年間の和服費も多くなっている。また和服の着装ルールに対しても自信をもっており、ほとんどの人が自分で着付けができると答えている。和服の機能への評価でも、和服愛好型が実用面での機能に高い評価を与えているのに対して、洋服愛好型は否定的である。

また“着物は持っているだけでも十分楽しいものだと思う”といった質問項目に、和服愛好型63.5％、和洋二

重型45.3％の人が肯定している。つまり洋服に比べ和服は現代でも財産として、あるいは趣味の対象として受けとられており、それが心の豊さにつながるものといえよう。またこのような傾向は、和服の高級化、趣味化をますます促す結果になるといえる。

つぎに媒介変数との関連を住居形態と余暇の過ごし方についてしてみると、住居形態、なかでも和室数との関連では、和服愛好型から洋服愛好型へいくほど和室数が減る傾向にあり、しかも和服愛好型では和室がまったくないという人は1人もいない。和服と畳とはきいてもきれいな関係にあるといえよう。余暇の過ごし方においても、和服愛好型では趣味や習いごとで過す人の割合がもっと

● 外出用長所持枚数

 $\sqrt{Cr}=0.285$

● 年間和服費

 $\sqrt{Cr}=0.315$

● 和服のTPO認識度

 $\sqrt{Cr}=0.252$

● 和服着付けの可否

 $\sqrt{Cr}=0.260$

● 着物は動きづらくて肩がこるので着たくない

 $\sqrt{Cr}=0.250$

● 和服と洋服の二重生活は不経済なので和服は必要だと思う

 $\sqrt{Cr}=0.264$

● 和服は ひもを何本も結ぶとか自分で帯の形を.....

 $\sqrt{Cr}=0.270$

● うんと おしゃれをしたいと思ったとき着物を着たくなる

 $\sqrt{Cr}=0.188$

● 着物はただ持っているだけでも十分楽しいものだと思う

 $\sqrt{Cr}=0.173$

● 和室数

 $\sqrt{Cr}=0.283$

● 余暇の過ごし方

 $\sqrt{Cr}=0.253$

- ア. 休息にあてる
 イ. 新聞や雑誌をみる
 ウ. テレビを観たり、ラジオを聴く
 エ. 読書をする
 オ. 趣味、習いごとにあてる
 カ. 知人、友人と雑談をする
 キ. スポーツをする
 ク. 教養や資格取得のために勉強する
 ケ. その他

図4 タイプ別クロス集計結果

も高くなっている。つまり住居形態が和風なのか洋風なのか、余暇時間をどのように過しているのかといったようなその人のライフスタイルが和服の着装にも大きな影響を与えていることが明らかになった。

収入や年齢、ライフステージなど基本属性との関連をまず本人の収入についてみてみると洋服愛好型より和服愛好型の方が、収入の多い人の割合が高くなっている。生活のゆとりが和服の着装に大きな影響を与えているといえよう。年齢との関連では、洋服愛好型の方が比較的年齢の若い人で占められている傾向がみられるがそれほど関連はなかった。ライフステージとの関連でも、洋服愛好型にいくほど小さい子供を持つ割合が高くなっているもののそれほど高い関連はみられなかった。つまり年齢やライフステージといった基本属性がストレートに和服の着用頻度に結びつくのではなく、同じ年齢やライフステージでもその人の日常の生活が洋風志向なのか、和風志向なのか、あるいは余暇時間をどのように過しているのかといったようなライフスタイルによ

図5 数量化Ⅱ類による分析結果の累積グラフ
(和服の機能への評価)

て大きく左右されるといえよう。

3.3 数量化Ⅱ類による分析結果

数量化Ⅱ類は外的基準（問題にしている複数の属性に付与すべき数量を決定するための外的に存在する基準）が分類（グループ）で与えられているとき、同じ外的基準グループに属する個人は相互に近い値を、異なるグループに属する個人は互いに離れた値をとるように、1組の定性的変数を総合した判別得点を求める方法で、判別効果の測度として相関比 η^2 を考え、これが最大になるように個々の変数（アイテム）のカテゴリ（変数値）を数量化するものである。分析のねらいは、算出された各変数のカテゴリの数値や大きさや方向について比較して、個人のどんな特性が各グループの差異に強く効いているかを知ることができる。

タイプ別クロス集計では、各タイプと個々の変数との関連をみてきたが、ここでは独立変数や媒介変数、従属変数などの諸変数のなかでどの変数がよりタイプ分けに貢献しているのかを探るために、着用頻度によって分類した3タイプを外的基準として数量化Ⅱ類による分析を行った。なおプログラム上の制限のためすべての変数を一度に分析することができないので、基本属性、ライフ

スタイル要因。和服の機能への評価の要因群に分け分析を行った。判別効果を相関比 η^2 でみると、基本属性が0.55(第2根)、ライフスタイル要因が0.58(第1根)、和服の機能への評価が0.63(第1根)となった。表14は和服の着用頻度によって分類した3タイプを外的基準として和服の機能への評価を数量化Ⅱ類によって分析した結果である。第1根のウェイト、レンジ、偏相関係数は、和服愛好型と洋服愛好型を、第2根のウェイト、レンジ、偏相関係数は、和洋二重型と洋服愛好型を弁別するための数値である。またレンジ、偏相関係数の値が大きいほど、その変数のタイプ分けに果たす影響が大きいことを示している。欄中の①②……の数字は、各変数が3タイプの弁別に寄与している度合をレンジと偏相関係数の大ききで判定し順位をつけたものである。この結果を第1根について偏相関係数との関連でみてみると、着付けの面倒さや むずかしさに対する評価、つまり、面倒でも普段着用する気になるかどうかや2つのタイプを弁別する大きな力になっている。ついで和服を着ることでイメージチェンジをはかりたいと思っているかどうか、日本人には和服がいちばん似合うと思っているかどうか、和服と洋服の二重生活を不経済と思うかどうか、冠婚葬祭にはやはり和服がいいと思うかどうかといった変数が2つのタイプの弁別に大きく寄与しているといえる。つまりこれらの変数に肯定的か否定的かをみればどちらのタイプに属するか太よそ推測できるということである。第2根についても、身内以外の結婚式や葬式でも和服のほうがあらたまった感じがしていいと思うかどうか、和服姿の方が洋服姿より、上品でいいと思うかどうか、着物は動きづらいので着たくないと思うかどうか、和服を上手に着こなしている人をみるとうらやましいと思うかどうか、あらたまった場所では和服がもっともふさわしいと思うかなどが和洋二重型と洋服愛好型を弁別する重要な変数になっているといえる。つまり伝統的な和服を高く評価し、あらたまった場所には和服が最もふさわしいと思うかどうかをみればどちらのタイプに属するか太よそ推測できるということである。図5は、個々人が和服の機能をどのように評価しているかといったことが、2つのタイプをどれだけ弁別しうるかその判別効果を累積グラフで示したものである。第1根では2タイプの判別の中率は87%、第2根では69%であった。この結果からも明らかなように個々人が和服の機能をどう評

価しているかといったことが、和服の着用頻度を大きく左右する要因になっているといえよう。

4. 結 言

現代女性の和服に対する意識や行動に関する調査結果から、つぎのようなことが明らかになった。

1) 和服の機能への評価結果からも明らかなように、活動性や着付けのむずかしさなど実用性の面での評価は低く、日常生活には不向きだとする反面、社会性や審美性、ファッション性といった面での評価は高く、現代女性にとって和服は、非日常的な場における儀礼用として、あるいは生活に豊かさや うるおいをもたらす おしゃれ用として重視されており、和服の高級化、趣味化、ファッション化は今後ますますその傾向を強めるものと考えられる。

2) 年令が若くなるほど、和服の着装ルールに自信のない人、自分で着られない人、縫えない人が増加しており、和服情報への関心度や年間の和服費では、40代から50代の女性がもっとも高くなっている。

3) 日常の衣生活が洋服化したとはいえ、まったく洋服しか着ない洋服愛好型は17.1%ともっとも低く、現代女性にとって和服は儀礼用として、あるいは おしゃれ用としてあらたまった場面では最もふさわしい衣服として重視されていることが明らかになった。

4) 数量化Ⅱ類による分析結果では、和服の着用頻度によって分類したグループの差異をもっともよく判別する要因は、和服の機能への評価であり、ついでライフスタイル要因、収入や年令、ライフステージといった基本属性の順であった。

参考文献

- 1) 中川早苗; 繊維機械学会誌 (繊維工学) **34**, No. 2, P119 ~129 (1981)
- 2) 村上信彦; 服装の歴史Ⅱ, 理論社 (1961)
- 3) 大橋英士; きものを斬る, 商業界 (1971)
- 4) 吉田 昇, 門脇厚司, 児島和人編; 現代青年の意識と行動, NHK ブックス (1978)
- 5) 安田三郎; 社会調査ハンドブック, 有斐閣双書 (1978)
- 6) 西田春彦, 新 睦人; 社会調査の理論と技法(Ⅰ)(Ⅱ), 川島書店 (1976)
- 7) 林知己夫, 村山孝喜; 市場調査の計画と実際, 日刊工業 (1964)
- 8) 三宅一郎, 中野嘉弘; SPSS 統計パッケージ(Ⅰ)(Ⅱ), 東洋経済新聞社 (1976)

(昭和58年3月22日受理)